

東寺所蔵 元禄本「現図曼荼羅」制作の史的意義

—仁和寺における開眼供養を中心として—

上嶋 悟史（宮内庁三の丸尚蔵館）

九世紀に空海が長安青龍寺の恵果和尚から伝授された両界曼荼羅は「現図曼荼羅」と呼ばれ、東寺に珍蔵され、転写の繰り返しによってその図像が継承されてきた。その現図曼荼羅は、宮中真言院あるいは紫宸殿を主たる道場とし、東寺長者が大阿闍梨を務め、玉体安穩、皇祚無窮、鎮護国家、五穀豊穰を祈る後七日御修法において、本尊として懸用されてきた。すなわち現図曼荼羅は、最重要修法の本尊としてわが国の密教史を貫くものであり、機能面、受容面などにおいて美術史上の最重要仏画の一つであるといえる。

空海請来本の第四次転写本であり、現在の御修法でも本尊とされる元禄本の開眼供養は、元禄六年（1693）十一月十八日に勅会として仁和寺で執り行われた。その詳細は『東寺曼荼羅供養部類』、『久修園続集』、『正直和尚行業記』、『家瀬公記』、東寺百合文書、仁和寺史料等の一次資料から確認できる。本発表では元禄本の新写に注目し、筆者や願主、施主などの制作主体や、開眼供養に携わった実務者たちがそこにいかなる意義を見出していたのかを明らかにする。

元禄本の願主は、仁和寺真乗院の孝源であった。発願から開眼供養まで一貫して主体的役割を担った孝源は、東寺長者として御修法の大阿闍梨を務め、老朽していく曼荼羅を目のあたりにしていた。その孝源より伝法灌頂を受けた久修園院宗覚律師が、弟子らを率いて元禄本を描いた。画事をよくした宗覚であるが、元禄本の新写にあたっては不明瞭な部分を補填するため十世紀の真寂筆『諸説不同記』を参照するなど、より古い図像を再現しようと尽力した。また元禄本の箱書きからは、徳川綱吉の生母・桂昌院が施主であることが知れる。すなわち元禄本の新写は桂昌院が各地の社寺に施した一連の復興事業に含まれるといえるが、桂昌院が帰依した護国寺の亮賢が仁和寺にゆかりをもつため、個人的な信仰心とも関わっていたと思われる。

開眼供養で読み上げられた願文は、文章博士であり元禄年号の勤申者である高辻長量が起草し、空海の書法を強く思慕した近衛家瀬が清書した。空海が創始し、祖父である後水尾天皇の御代に再興された御修法の本尊の開眼供養は、家瀬の自意識と深く結びついていたと想像される。そして長量の起草、家瀬の清書という組み合わせが前年に行われた東大寺大仏の開眼供養願文と一致することから、元禄本の開眼供養が大仏のそれと同じく国家的重要性をもって認識されていたことが判明する。

以上のように、元禄本の制作は聖俗の貴顕による様々な信仰や意図が絡み合った、国家的大事業であった。こうした意義づけに加え本発表では、元禄本がおそらくは仁和寺で制作されたであろうことを、本図の描表具が安永八年（1779）の「孔雀明王像」（仁和寺）と一致することなどを挙げつつ明らかにする。